

# 大都市部における高齢者の家族・親族 コミュニケーションに関する調査研究・序報

## 一 愛知県春日井市・高蔵寺ニュータウンにおける 高齢夫婦への面接調査を中心に 一

安達正嗣

### 1 高齢社会と家族・親族コミュニケーション

わが国の高齢化率（65歳以上の人口比）は、1970年に7%に達し、94年には14%を越して、99年には16.7%となっている。これは、諸外国とくらべて最速であることは、よく知られたことである。ここに至ってわれわれは、もはや高齢化の進行を「老人問題」という特殊な社会現象として論じる時代から、現代社会のなかで一つの常態として冷静に受けとめる新しい時代へ、と移りかわってきている点を認識する必要があると言えるであろう。

またほぼ同時期に、高齢者の家族形態も大きく変化してきている。近年の傾向として、祖父母、親、孫と一緒に暮らす三世代同居世帯の割合が急減しているのに対して、夫婦暮らし世帯やひとり暮らし世帯の割合の急増が生じている。つまり、高齢者と家族のライフスタイルは多様化しているのである。この要因は、1960・70年代には仕事を求めて大都市に移住した子が高齢の親を郡部に取り残したことによるものと言われてきたが、現在では、各種の意識調査の結果などをみると、むしろ高齢者みずからによって子家族と離れて暮らすライフスタイルが選択されているばあいも多くなっていると考えられる。

こうした高齢化ならびに高齢者の家族形態の変化に対しては、一人の高齢者を何人の若・中年者が支えることになるかといった図式を示したり、将来の年金や介護費用などの増大が明らかにされたりして、おもに悲観論的な論調が目立っている。もちろん筆者も、国家財政への圧迫、国民負担の増大などが予測されており、軽視できる問題とは決して考えているわけではない。しかしながら、都市化や産業化の進行した社会においては、ほとんど例外なく高齢化が生じており、否定的にばかりとらえては、未来への展望は開けないと思われるのである。いま必要なことは、過度な危機感をあおるより、冷静な眼で前向きに高齢社会をとらえなおしていくことであり、そして高齢者の視点に立って家族・親族関係を再考してみることである。

かつて人生50年・60年と言われていた時代には、末子が成年に達するまでに親が亡くなることは決してまれなことではなかった。平均寿命の急速な伸長によって人生80年時代をむかえると、高齢の親あるいは高齢夫婦として暮らす期間は大幅に延長されてくることになる。高齢期の家族との暮らしが長期化したことによって、その内容自体も変化しているが、子や孫などとの関係に関して模範となるようなモデルはまだ定まったものはなく、手探りの状態である。現代の高齢者世代にとって、自分たちの祖父母や親の暮らし方は、あまり参考にならなくなっている。われわ

れは、高齢期において子や孫との関係をどのようにつくりなおせばよいのかという問題に悩むことになるわけである。

言いかえれば、高齢者自身が主体的に選択できる、選択しなければならない新しい家族生活の時代となってきたのである。ここで必要なのは、成人子による老親に対する一方的な扶養といった「家族のなかに含まれた高齢者」ではなく、「個としての高齢者による家族の再構築」という視点から考えていくことが不可欠となると思われる。この「個としての高齢者による家族の再構築」とは、高齢者の立場から家族関係をとらえなおすことであり、筆者はそうした再構築させた家族を「高齢期家族」と呼んでいる。（詳しくは、拙書『高齢期家族の社会学』世界思想社、1999年を参照）

家族・親族関係の主体的な選択あるいは再構成にとって重要な課題が、コミュニケーションのあり方である。現代の主流をしめるサラリーマン家庭は、生産活動から離れて消費のみの場になっており、集団としての共同性が薄れるなかで、個人化が進行している。個人間の関係は家族においても、コミュニケーションによって維持される側面が強く、高齢期の家族生活の選択そして再構成には、こうしたことが重要となる。こうした高齢期の家族・親族関係の再構築に関する研究において、コミュニケーション論の視点が重要であることは、すでに拙稿（「高齢期の家族関係」中川淳編『家族論を学ぶ人のために』世界思想社、1999年、192-204頁）で強調したところである。

本稿は、これからの高齢社会においてもとめられる家族・親族コミュニケーション研究をおこなうための序報として位置づけられ、愛知県春日井市にある高蔵寺ニュータウンの高齢夫婦への面接調査の結果、ならびにそこから得られた知見を整理して、今後の研究課題をみいだしている。

## 2 調査地の概況と集団面接調査の結果

### (1) 高蔵寺ニュータウンの概況

本報告では、愛知県春日井市にある高蔵寺ニュータウンの高齢夫婦への面接調査を通じて、とくに夫婦関係のあり方ならびに家族・親族関係のあり方にとって必要とされるコミュニケーション能力を考えていくための基礎作業をおこなっている。

千里ニュータウンをはじめとする全国の大都市周辺の大規模なニュータウンは、すでに初入居から30年ないし40年ほどを経ており、急速な高齢化の進行にともなって、いわゆる「オールドタウン化」してきていると言われる。若中年期にニュータウンの新住民として核家族（夫婦のみ、夫婦と未婚子など）で初期に居住した人びとは、すでに定年退職前後ならびに子育て後の空巣期といった中高年期をむかえている。居住後に地域社会と共に、子家族との関係が新しく形成されてきたのである。地域の変遷につれて、入居者とその家族は年を重ねており、地域住民がそろって高齢期を迎えることになる。

最近になってニュータウンが注目を集めているが、都市郊外における若中年層の住民のかかえる家族病理的な現象を取りあげている研究が多く、高齢者層に対する研究はまだ少数にとどまっ

ている状態にある。しかしながら、ニュータウンの高齢者が再構築する家族は、まさにモデルなき高齢期家族のパイオニア的存在であり、そこから学ぶものは大きいと考える。

さきに述べたような研究目的からみて、「個としての高齢者」として家族コミュニケーションをどのようにおこないながら、モデルなき高齢期の家族・親族の再構築していくかを探るためには、ニュータウンはきわめて適切でもっとも興味深いフィールドであると言える。今後の団塊の世代のつくる高齢期家族や高齢社会全体を考えるうえでも、ニュータウンをフィールドにすることは重要な意味をもっているのである。ここでは、名古屋市郊外の愛知県春日井市にある高蔵寺ニュータウンを調査地としている。

1960年代半ばごろより、都市化による大都市への人口集中から、全国で相次いで大都市周辺に大規模な住宅地がベッドタウンとして建設された。JR名古屋駅から普通電車で20分ほどのところにある高蔵寺ニュータウンも、そのなかのひとつである。東京の多摩ニュータウンに先駆けて、大阪の千里ニュータウンとはほぼ同時期である60年に、名古屋市郊外の春日井市で高蔵寺ニュータウン計画が住宅・都市整備公団（旧日本住宅公団）によってスタートした。事業年度は、65年度から81年度である。住民の実際の入居は、68（昭和43）年から始まっており、98（平成10）年に、入居開始から30年をむかえている。ニュータウン内部は、藤山台、岩成台、高森台、中央台、高座台、石尾台、押沢台に分かれている。また、ニュータウン内の主幹線道路によって3つのゾーンに分割して、中央にシンボルである「センター」部分をつくっている。そこには、76年にオープンしたショッピングセンター「サンマルシェ」がある。現在、住宅地は約56%をしめており、集合住宅を中心にした高密度ゾーンと中密度ゾーン、一戸建てを中心にした低密度ゾーンを組み合わせ、変化と秩序のある町並みを形成している。

1998年2月1日現在、総面積は約702ha、人口は50,881人（男性25,009人・女25,872人）、世帯数は18,161世帯となっており、表1のように、高齢化率は、90年の4.7%から95年の7.1%へと、とりわけ90年代に入ってから急増傾向にあり、高蔵寺も全国のニュータウンと同じく、オールドタウン化の道へと歩んでいることを明確に示している。

表1 人口と高齢化率の推移

	春日井市		高蔵寺ニュータウン	
	総数	高齢化率（総数）	総数	高齢化率（総数）
1980年	244,199人	5.3%（12,952人）	—	—
1985年	256,990人	6.5%（16,675人）	—	—
1990年	266,599人	8.0%（21,211人）	50,440人	4.7%（2,364人）
1995年	277,589人	9.9%（27,461人）	51,312人	7.1%（3,622人）

資料出所：「国勢調査」、「春日井市統計書」、「あいちの町丁目・字別人口」

## （2）集団面接調査の結果

1998年3月に、高蔵寺ニュータウンの8人（女性1名、男性7名）の中老年居住者に対する集

団インタビュー形式の座談会を開いた。入居からいままでの暮らしぶりについて、家族・親族関係を中心にたずねている。単純に一般化するわけにはいかないが、つぎのようないくつかの知見が明らかになり、高齢期の家族コミュニケーション能力の研究にとって仮説となり得る可能性のあるものである。

- ① 子がおらず夫婦だけで暮らしているばあいには、積極的に地域とのかかわりをもっていること。
- ② 共働きの娘夫婦との同居のばあいには、幼いときに孫育てにかかると、生活時間のズレもあって、孫は成長してからも父親よりも祖父のほうが頻繁に交流すること。
- ③ しかし孫との生活は、成長するにつれて食事やテレビ番組の違いなどというように、世代間のコミュニケーション・ギャップが大きいことを強く意識させられるものであること。
- ④ ニュータウンでも当初は、いわゆる「べったり同居」といった生活の共同型が多くみられたが、現在では生活を完全分離した二世帯住宅がほとんどであること。
- ⑤ 親の住むニュータウンの一戸建てを改築して、名古屋市などから子家族が同居のために移り住んでくるばあいが多いこと。全体的には高齢化は進行しているが、これが地域によっては高齢化率を鈍化させるひとつの要因になっていること。
- ⑥ 高齢の親をニュータウンに呼びよせて同居したばあい、新しい居住者に対して地域が比較的柔軟であるために、孤独にならずに適用しやすいこと。
- ⑦ ニュータウンにおいても、地域に閉鎖的になる夫婦暮らしや一人暮らしの高齢者が多くみられ、そうした高齢者の場合には家族や親族との交流も少ないこと。
- ⑧ 一口にニュータウンと言っても、地域でそれぞれに個性があり、近隣とのつきあいだけでなく、家族や親族とのつきあいにも影響をあたえている可能性のあること。

### 3 個別面接調査の結果と知見の整理

#### (1) ニュータウンの高齢夫婦

高蔵寺ニュータウンに居住する高齢夫婦に対して個別面接調査を実施している。これは、個人の生活史（とくにニュータウン居住後）のなかに位置づけながら、現在の家族・親族コミュニケーション状況を明らかにするためである。つまり、高齢者の家族・親族・地域ネットワークが人生のなかでどのように形成されてきたのか、とくに中年期から高齢期にかけて夫婦関係がどのように変化し再構築されていったのか、などといった問題設定をしている。具体的には、おもにつぎのような質問項目を設けることにした。

- ＊ 調査対象者の生活史全般について。とくに高蔵寺ニュータウンへの入居の前後の状況、これまでの生活状況について。
- ＊ 生活史における配偶者、息子・娘、孫、男・女きょうだい、甥・姪、実親・義理の親、その他の親戚との現在までのつきあい（コミュニケーション）の状況について。また、地域活動や社会活動のなかで、それらが変化してきたかどうかについて。

以下では、3組の高齢夫婦に対する個別面接調査の結果を報告している。なお、年齢などは2000年10月現在のものである。

（Aさん夫婦：夫婦のみの暮らし、夫76歳・妻71歳）

夫婦のプロフィール：夫は1924（大正13）年に長野県で、妻は29（昭和4）年に中国大陸で、それぞれ生まれている。夫のほうは、官庁勤めを経て、運送会社に勤めなおしてから10年前に定年退職で辞めている。妻のほうは、朝鮮半島を経て、41年に愛知県にもどってきている。68年に結婚に名古屋で結婚し、高蔵寺ニュータウンのなかでも初期に建設された藤山台の集合住宅に、69年9月から現在まで住んでいる。子どもはなく、夫婦ふたり暮らしである。

入居当初と現在の地域の状況：入居した当時の周りの様子について妻は、「広かったですよね。もうとにかくバス停を降り立った時にも、本当に何て言うんですか。言葉で言うと、時期から言うと、晩秋の荒野っていうみたいな。赤土の造成地になってましてね」と述べている。もよりのバス停は、JR高蔵寺駅からの終点となっていたのである。松坂屋ストアが1軒あったが、品物が悪く品数も多くなかった。そのために、同じ集合住宅などの地域で暮らす人びとが1970年に自治会をつくり、その役員が魚や野菜を産地で買い出しをして青空市場で売り、牛乳も自治会の女性部の役員が各戸に配ったりしていたとのことである。電話も、お金を出し合って集合住宅の10軒に1つ設置したり、中日新聞の取次店が中継所になってくれたこともあった。当時の入居者たちは、ほとんどが30歳代や40歳代であり、自分たちで生活をつくっていくという活力があった。しかしながら、店が増えて、生活が便利になるにつれて、近所づきあいも少なくなっている。現在では、高蔵寺ニュータウンのなかでもコミュニティ活動が不活発な地域である。

地域活動や社会活動：いっぽう老人会は、1972年にもっとも早く創設された地域でもある。小学校の初代の校長が中心になって「みどり会」という老人会をつくったのが、始まりである。自治会で支援するために、夫が55歳になったときに夫婦で参加している。妻が茶道の師範をしていたこともあり、そのころから現在まで老人会にはお茶をたてたり教えたりしてきた。妻は、華道の師範でもあるので、自宅ならびに東部市民センター（市の公民館）などで30年間ほど教え続けている。それについて妻は、「3年前からは、ニュータウン全体の老人会の女性部に呼びかけて、あちらこちらから希望する人が集まって、東部市民センターで月1回老人会女性部の生け花っていう、それはボランティアでやっているんですけどね。初めは続かなかと思ったら、けっこう皆さん楽しみで、『あなたも若返ったね、あなたも若返ったね』って言うぐらい、ほんとうに來られたころよりみなさん・・・」、「25人で始めて、いまでも25人を保っているんですね。お花をいじることだけではなくて、やっぱり女性だもんですから、ちょっと1枚着替えてとか、あの方とかこの方の服装を見て刺激を受けると、初めのころよりみんな、服装でも派手になってくるんですね。ああ、あの方、私と同じぐらいの年なのに、素敵な格好しておかしくないわ、じゃあちょっともう少し派手にしてもいいかしらとか思うようです」、さらに「家族のなかでは、おばあちゃ

ん、おばあちゃんって呼ばれても、外に行けば、何々さん、で済むもんね。自分よりずっと若い人よりも、同世代で刺激しあうほうが、より効果的であるように思えます。少しだけしか離れていない人の服装をみると、私だってとなるでしょう」と述べている。また夫は、老人会についてつぎのように述べている。「老人会に入る人で、男性は少ない。いままでの経歴、いろいろ残っていますからね。それから離れられない。そうなんです。一緒に趣味の講座などだと集まれるけれども、老人会だとカッコつけて行かない。それでも、比較的、個人住宅の男性のほうが集合住宅に比べて、男性同士の近所づきあいもあって出てきますね」。

**地域における家族の状況：**妻は、民生委員を25年間、続けているので、集合住宅などにおける家族状況をよく把握しているとして、つぎのように述べている。「男性では、ひとり暮らしは少ないですね。まあ圧倒的にひとり暮らしは女性のほうが多いわね。民生委員を25年間やっているものですから、このニュータウンのいろんな人たちの変化も移り変わりもすごくよくわかります」。「入居から当分の間はね、なんにも問題のない、民生委員のお役しててもなんにも問題のない、事の起きないところでしたよね。だけど、ここ10年ぐらいは目まぐるしく、とくにここ5年ぐらいはいろいろな問題が多発ですね。高齢者が増えたってこともありますね。ひとり暮らしが増えてっていうことね」。「女性の場合、子どもたちと一緒にいたけれども、まあいろいろと折り合いが悪くて自分だけこちらに移ってきたとか。広い個人住宅にいたけれども、子どもも出ていったので、また夫も亡くなったので、集合住宅に移ってきて、ひとり暮らしをしているとか」。「地域でも、入居の最初のうちは家族同士でつきあうとか、なんかいろいろとそういう雰囲気があったんでしょうけど、だんだんいろんな人が増えてくると、閉鎖的になってきますよね。この家族の中に、あんまり他人を入れないとか」。「どこへ住んでも、自分が隣のこともなんか知らんわってやってれば、お互いがそうなっちゃいますけど、やっぱり自分からお隣さん大事だわって気持ちで接すれば、人間同士だから伝わっていくと思うんですね」。

**自分たちのきょうだいなどとの交流：**妻のきょうだいは3人とも健在であり、自分が長女で、下の3人が男である。男きょうだいたちは、すでに定年退職をして名古屋市内で暮らしている。一番上の弟のほうは、子ども（姪）が小学校1年生のときに妻を亡くしているので、よく手伝いに通った。いまでも、その弟のところには毎月のように行っている。その姪や2番目の弟の娘は、華道を習いに、毎月自宅に通ってきており、子育ての相談を受けたりして交流が盛んである。また、ニュータウンに入居したところから8年間、その弟のところに実母が寝たきりとなっていたので、毎週1晩泊まりで介護に行っていた。毎年きょうだいとその家族が集まって、両親の墓まいりに行ったりもしている。夫のほうはきょうだいもなく、その他の親戚との交流もまったくない。

**夫婦関係や高齢期のあり方：**子どもがいないこともあるが、夫婦のコミュニケーションは頻繁におこなわれている。妻によれば、「皆さんね、夫が定年になっちゃって、うちにいても話すことがないだとか、それは全然ないうちはないですね。だから私、ふっと思うのは、まずどうかするとご飯を食べた後でしゃべって、夫が『おまえと話しとったら明日の朝になる。寝るぞ』なんて言うときあるんですね。だから、何と決めて会話するわけじゃないですけど、まあ野球、なん

かあると野球ばかりの話しだから。老後に、ふたりで漫才みたいなきがかりまして」。「私ども、もともと子どもがいないもんですから、常にふたりで対話してきて、そういうスタイルがもうできちゃっているから。子どもがいた人のように、老後にあらためて意識なくていいんです。だから、結局、『子どもがなくて寂しいでしょう』とかおっしゃるけど、まあ言葉のうえでは『そうね』とか言うけど、それはやっぱり、持っていたものがなくなったときの寂しさだと思うのね。もともと持っていないのに、わからないですよ」。「夫に意識して気をつかうこともないですね。夫も定年になってからね。いままで知らなかった私の個人的なお友達とのつながりとかつきあひも、オープンだから、よく逆に、いままで会社勤めでわからなかったのが、より私のことがわかってきたと思うんですよ。で、もう、お友達との電話でのやりとりでも、たまに怒ったようなことを言ってみたりでも、全部聞いているもんですから、私の性格も、外へ向かっている性格もみんなわかっちゃってる」。

夫は、定年後の夫婦のあり方について、つぎのように述べている。「定年までは、家庭じゃなくて、外のことをやとったわけです。平日は仕事、休日は自治会。定年してから、自分が退屈せんように何をしようと考えたんです。妻は、花を教えたり民生委員をしたりで、外のことをしているの、じゃあ、僕が家庭をみよう。家庭のなかのことをやってみようということで、それまで外のことをやったから中をやろうと切り替えると、お茶入れから、掃除、洗濯、買い物、植木、退屈なんてもんじゃない。主は家庭で、外の自治会活動は続いています」。「戸棚のものをいじると、妻はどこにいったかわらなくて探すってこともあるけど。それで、お互いの気持ちがわかるようになったよ。それがなきゃ、やらんわね」。

#### （Ｂさん夫婦：夫婦のみの暮らし、夫72歳・妻82歳）

夫婦のプロフィール：どちらも名古屋市出身で、夫は72歳、妻は82歳である。夫のほうは、働きながら名古屋市内の新制高校の夜間部を卒業して、同市で家業の青果業に就き、1958年に結婚して独立し店をもち、81年に椎間板ヘルニアのために廃業・隠退して高蔵寺ニュータウンの一戸建てに住むことになる。隠退後は、年金と預貯金で暮らしている。父親は61年、母親は75年に、それぞれ亡くなっている。妻の詳しい経歴はわからない。子どもはいない。

入居当初と現在の地域の状況：名古屋市の中心部から移ってきた当初は、最果ての陸の孤島にきたように思えた。近所には、同時期に新しく移ってきた家が3軒あり、またニュータウンができる前の村に5、6軒の家があった。しばらくの間は、名古屋市内で買いだめをして暮らしていた。自然が残っていたので、夫婦ともに健康状態はよくなっている。名古屋での友人や知人とのつきあひが入居後の5、6年ほど続いていたが、来る人もしだいになくなり、近所の人びととの交流が中心になっていく。入居後2、3年で夫婦ともに、東部市民センターでおこなわれる歴史的な文献を読む講座に通いだし、友人ができるようになった。しかし夫のほうは、1986年に民生委員になってからは、講座から遠ざかり、そちらの仕事が中心になる。ほとんどが一戸建てに住んでいる地域のためもあり、家庭外に対して閉鎖的な傾向が強くみられる。夫婦に子どもがい

ないことから、子どもを通じたつながりがなく、近所とのつきあいはスムーズにはいかなかったようである。妻は、「やはり（近所の）奥様が、どうしてもお嫁さんのことを取り上げられるので、私にはわからないしね。知らんままに聞いてもわからないし、あんまり聞いていいのか悪いのかと思って……。で、お嫁さんとも親しくしますし、奥様とも親しくすると、聞いているのがいやなのよね、気が重くなってくるのよね」と述べている。

また夫も、「それはありますね。どうしても、家族のこと、親子関係のこと、子どもさんに関する話題が多いですね。そういうことになると、われわれの入る余地がないっていう……」と述べている。地域でのつきあいについても、夫はつぎのように述べている。「町内会長をしましたころは、まだ初期（1982年）で、人家も少のうございまして、それこそ和気藹々とおこなっていたという記憶もありますが、いまとは全然違いますね。いまはひじょうに難しい面を抱えていて、町内会長さんも大分困っているようですけど、ほんとうに、いまの役員さんと会って話しても、あのころはよかったね、となんだかおかしい話しですけど。あのころは、自宅に集まってもらい、一緒にご飯も食べられて。いまはそんなこともう絶対にできないですね。うちはいまでも、どなたがいらしても、上がってという風にしているものでね」。

地域における家族の状況：夫によれば、「周りのご家庭は、確かにたいへんな面もあるんですけど、まあ全体的にみて、うまくいっているんじゃないですか。親子関係と言いますか、そういうこともいろいろとよく聞いたり見たりするんですが。べつに、まあそれほど深刻な問題はないみたいですね。そこに介在するのはやっぱり、子はカスガイと言いますか、それぞれのご家庭がうまくやっていらっしゃるみたいです。そうすると、われわれの入る余地がないということですね。興味と対象が違ってきますからね。せいぜい子どもさんの自慢話くらいですね」である。

地域活動や社会活動：現在でも、夫は地域活動に熱心である。「コミュニティにも関わりましたし、社会福祉協議会が地区で独立して、2、3年前から小学校単位でつくろうとしています。これからは、地域のことは地域でやっていかなきゃいけません」。「まあ漫然とした活動ではいかんもんですから、市の社協の勧めもあって、ふれあい事業という形で、助成金をもらってふれあい事業をやっているんです。あとは、単発的な一般的なことを集めた会費のなかで関連したことをやっているだけですけれども。目指すところは、介護予防ですね。高齢者の引きこもりを何とか解消しようと、テレビの番をしている人たちを引っ張り出そうっていうのが1つの眼目で。40代以上の方にはご協力いただいています」。「どちらかと言えば、後から来られた、呼びよせられて来られた高齢者の方のほうがどちらかというと、引っ込みがちですね。ひとり暮らしの方のほうが、ひじょうに積極的、むしろ、もう1つ飛び越えて、もっとも積極的なのが、ひとり暮らしの方。また、女性のほうが積極的です。しかし、奥さんが旦那さんをつれてくることはないです。やはり夫のプライドが相当に強いのではないかと思います。男性のほうが引きこもりがちですね」。「まず、皆さんと一度、会話をしてみませんか、井戸端会議みたいなことをやりませんか、と。その間に若い人たちが、町内の若い奥さんたちがお手伝いをしてくれるので、体操をやったり、歌を歌ってみませんか、という。知った人が出れば、一緒に行こうか、というのが多いです



ね」。一度おいでになれば、けっこう楽しんで帰ってゆかれまして、そうなれば、自分から楽しみにしていただいている例もあります。うちの地区社協では、ひだまり交流会と言っておりますが、老人会とはまた違うかたちで、協力委員さんを募集してやっています」。

自分たちのきょうだいなどの交流：妻は、11人きょうだいの一番末子で、唯一の女性である。上の兄たちは戦争で亡くなっており、名古屋市老人施設に99歳になる兄がひとりだけ健在である。きょうだいたちの甥や姪とは、盛んに交流をしており、よく自宅にも訪ねてきてくれる。その兄の甥とは、一緒に見舞いに行ったり電話で連絡をとりあったりしている。兄自身は、いまでも元気で、書道をしたりしている。夫のほうは、7人きょうだいあったが、いまでは3人健在である。夫自身は、下から2番目で4男にあたる。夫によれば、「最後の妹が名古屋におりますもので、そことはよく交流してるんですが、上の姉はちょっと遠いところにいますので、もう耳も遠くて電話もうまく意味が通らんということとでちょっと足が遠のいているんですけれども、まあ他のきょうだいの子もたちとは今はあまり交流ないですね。やはり近いこともあって、名古屋の妹やその家族とはよくつきあっています」である。

夫婦関係や高齢期のあり方：夫婦はそれほど話しをしないが、それによってうまく保たれているとしている。妻は、「話しくらいは、日常のことをいろいろ相談したりいろいろしますけれど、何か腹がたつときなんかあっても、全然相手にならない。私の場合はしょうがないね。けんかする相手がなくて……。わりと趣味がよく似ているから、そういう話しをすると2人が一生懸命になっちゃって。なんでもわりに、つまらないことが好きなことがありまして。私は、何でも取り込んで、すぐに興味がわいちゃうから、その点もあるかもしれないけど。取り込んでいっちゃう。こんな楽しいことがあるんだって。それはけんかする暇もないんじゃないですかね。ある程度、折れてついていけないかんということですね」、夫は「こちら（妻）は文学系が好きで、私はむしろ美術工芸の方が好きなもので。美術館などには、一緒に行っています。私は、椎間板ヘルニアになったことから、矯正に良いということで、能を勧められまして。筋肉が強くなって、ヘルニアも知らず知らずに治りました」、とそれぞれに述べている。

#### （Cさん夫婦：夫婦のみの暮らし、夫68歳・妻67歳）

夫婦のプロフィール：夫は滋賀県出身で68歳であり、妻は名古屋市出身で67歳である。夫のほうは、教員をしていた父親が35歳でなくなったので、苦学生として大学を卒業して、名古屋のテレビ局に勤めて1993年に定年退職している。61年に結婚して名古屋市に住んでいたが、69年に高蔵寺ニュータウンの集合住宅に移り、さらに81年に一戸建てを購入して転居した。83年に夫の母親が亡くなるまで、同居していた。娘が2人いて、長女は95年に就職と同時に名古屋市に移っている。次女は同居している。どちらも、未婚である。

入居当初と現在の地域の状況：高蔵寺ニュータウンの集合住宅に引っ越してきた当時は、買い物などの生活に苦労した。生活に慣れてきて、ニュータウンのなかにも商店が増加したところから一戸建てに移り住んだので、それ以後は不便はなかった。集合住宅のころには自治活動も盛ん

であったが、一戸建てになってからは、地域活動は不活発である。夫は、いま社会福祉協議会にかかわってコミュニティづくりに参加している。老人会も、むしろ20年ぐらい前までは、60歳代が中心ということもあり、歩こう会やハイキングなどをして、その活動は比較的盛んであったが、最近は入会する人が減少している。社協がやらなければ、リーダーのなり手がいないので、困っている状態である。

**地域活動や社会活動：**夫のほうは、Bさんと同じように介護予防運動にも参加している。「介護予防で、老人会に入っていない人をどうやって引っ張りだしてくるかが問題です。私どもは、70歳以上の人に無理やりお迎えに行きますよって連れてくる。老人会で、毎月2回は何かイベントをしていますから。たまたま老人会のイベントを共催するようにしていますと、いままで老人会に入っていなかった人が出てきて、近所の人が老人会に入っていることを知る。そしてその人と話しをする。それで、私も入ろうかなと言って、老人会に入ってくる。そういうのが去年から、すごく増えている。ですから、全域に70歳以上で老人会に入っていない人にお手紙を出しています」。また妻は、「隣の人は、三世代同居をしています。息子夫婦が共働きで家にいないので、そのおばあさんは留守番で家を出るわけにいかんと言っていましたよ。そこで、たまたま引っ張り出されて老人会の会合に出席したのです。近所の知り合いの人が老人会に入っているというのを聞いて、彼女も入ったのです。わたしたちの世代は、嫁は姑と同居しますよね、それで嫁は子どもの世話とか家事なんかをして家にいなければいけないという意識があるんですね。それで、この彼女の場合でも自分が留守番をしなければいけないという意識があると思うんです。それでもこのごろお医者さんに行った帰りにそこの喫茶店でみんなとお茶を飲んできたわとかいって喜んでみえるんです。だからそういう風に外に出るということはそこでお友達ができるんですよ。このごろお医者さんでお友達ができるみたいで喜んでみえますよ」、「私のところの場合は夫の母が55歳まで働いていて、私たちが結婚したら母が出るのが好きな人だったんで、私に『あなたはうちにいてください、私は外に出てきます』』ということを言われました。引っ越してから母は緑会という老人会でとても活躍しまして、名古屋の教会には日曜日、婦人会に金曜日行くんですけどね。私の名古屋の実家に両親がいましたので、そこに泊まるんですよ。そんな風に母はしょっちゅう外に出て行きました。近所の人におばあさんはお勤めですかと聞かれたこともあります。80歳になってもひとりで外に出歩いていました。学校の先生でしたから活動的なんですね」と述べている。

**自分たちの子やきょうだいなどとの交流：**夫のほうは、3人きょうだいで、姉はすでに亡くなっており、弟が愛知県内にいるが、年に1回ぐらい会うかどうかというように交流はあまりない。「弟とは、交流はなかったですね。弟は自由業ですから勤務時間がわかんないですよ。私は釣りが好きで近くまでよく行きます。その帰りによることがありました。むこうからこちらにくることはないですよ。弟の2人の息子とも、結婚式で会って以来ですね」。「私は母子家庭でしたので、周りの人に頼っていかなければならない。それで、叔父さん叔母さんにはお世話になりました。就職活動で横浜にいったとき、泊めてもらったり、そういうことがあって、私が叔父

さん叔母さんの家をたずねることが多かったので、叔父さん叔母さんの家族がうちに訪ねてくることが多いですね」。

妻のほうは、きょうだいとの交流が盛んである。11人きょうだいの6女であったが、現在は上のうち3人が亡くなって、女きょうだい5人はそろって健在となっている。上の姉にあたる次女78歳、4女72歳、5女69歳とのつながりは強く、今年と一緒に3泊5日の国内旅行を3回している。夫によれば、「今年は、私が運転手として高山、城崎の2回について行っています。自分もそうだが、妻のほうも男同士のつきあいはあまりないんじゃないでしょうか。女同士のつきあいはよくあるんですが。うちの弟は生涯現役で、弟夫婦だけで旅行に行っているらしいです。逆にうちの女房は私と2人だけでは行きたくないと。お姉さんたちと一緒にだから行くと。2女と5女は夫を亡くしています。私も、むしろ妻のほうのきょうだいの甥や姪とはつきあいがあります。妻の一番上の兄の息子は、私のテレビ局でアルバイトをしていましたよ。こちらから訪ねていくことはありませんがね」としている。いっぽう妻によれば、「男きょうだいの場合、奥さん同士違和感があるみたいですね。一番上と2番目の兄たちが一緒に仕事をしていたんですよ。それで2番目の兄がなくなったんです。その後、奥さん同士の交流は疎遠になりました」である。

夫婦関係や高齢期のあり方：夫は、「僕は、早くに父親は亡くなって母子家庭だから、いまでもひとりで何が何でも生きていかなければならないと思っている。でも、男はたいてい退職した後、奥さんべったりでないと、生きていけないんじゃないですか。男は、ますます孤立化している。個人化しているけど、高齢になるとそういうわけにはいかないでしょう」、また妻は、「私たちの世代は、きょうだいが多くてで人間的に強いですね。ちょっとやそっとのことじゃ、怖じ気づかないですね。子どもが少ないと、親が過保護になってしまいます」と述べている。

## (2) 知見の整理

以上の個別面接調査の結果から得られた知見について、つぎに整理しておきたい。

- ① 集団面接のなかにも示されていたように、子のいない夫婦は地域に対して開放的であり、ボランティア活動や文化活動などを活発におこなっていること。子のいないほうが高齢期の夫婦関係を比較的スムーズにすすめられること。また、その場合には、きょうだいや甥・姪との交流も盛んであること。
- ② 高齢の夫婦関係の課題として、夫がいかに自分なりの生活を定年退職後に見つけだすのかということが、あらためて浮かびあがってきていること。会社から、家庭や地域へいかに眼を向けて、退職後の生活を再構築するかが、夫婦関係を再構築するときにも重要な問題となること。その場合には、会社生活のなかで適応してきた自分の役職、仕事、学歴などからいかに脱却できるかがカギとなること。
- ③ いわゆる呼びよせ高齢者の場合には、同居した家族とは合わないために、集合住宅でひとり暮らしを選ぶ事例がみられること。しかしながら、そうしたひとり暮らし高齢者が引きこもっているとは限らず、地域活動などに積極的に参加しているケースも少なからずあること。

- ④ 女きょうだいは、男きょうだいに比べて交流が活発であること。これは、夫婦関係にも少なからず影響をおよぼすものであること。
- ⑤ とくに女性にとっては、家族のなかでの役割に基づいた行動だけでなく、家庭外での社会活動が生きるための活力をあたえること。

#### 4 高齢期家族コミュニケーション研究にむけて

現在のニュータウンに居住する高齢者の暮らしは、またその家族・親族コミュニケーションのあり方も、都市部の膨大な高齢者予備軍である団塊の世代（第一次ベビーブーム世代）の指針あるいは模範となるであろう。モデルのない高齢期家族の視点から考えると、今回の3例の面接調査による予備的な研究の結果を基礎データとして位置づけながら、さきの知見を「問題の発見」としてとらえて、さらに家族・親族コミュニケーションの調査研究を追究していくことが重要となる。とくに、今回は既婚子と同居している高齢者、ならびにひとり暮らしの高齢者について面接調査がおこなえなかったことは、今後の大きな課題として残されている。いっぽう、今回の調査研究は、高齢期の家族再構築の課題として夫婦関係やきょうだい関係におけるジェンダーの視点が重要であることも示唆していると言えるであろう。

#### 参考・引用文献

- 安達正嗣、1999、『高齢期家族の社会学』世界思想社。
- 安達正嗣、1999、「高齢期の家族関係」、中川淳編『家族論を学ぶ人のために』世界思想社、192-204頁。
- 中日新聞社春日井支局、1998、『ふるさと高蔵寺の光と影：30歳のニュータウン』中日新聞社。
- 福原正弘、1998、『ニュータウンは今：40年目の夢と現実』東京新聞出版局。
- 住宅・都市整備公団中部支社、1998、『トピカ：高蔵寺ニュータウン入居30周年記念特集』。
- 西下彰俊、1997、『高蔵寺ニュータウンにおける中高年集合住宅者の生活意識調査』（財団法人）名古屋都市センター。

＊ この調査研究は、1998年度から2000年度までの日本学術振興会科学研究費補助金（萌芽的研究）・課題番号10871033「大都市部の高齢者の家族・親族コミュニケーションに関する社会学的研究」の一部として実施したものである。